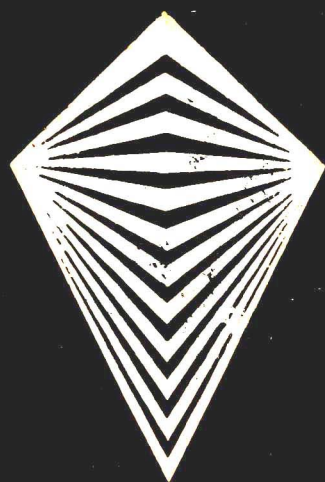
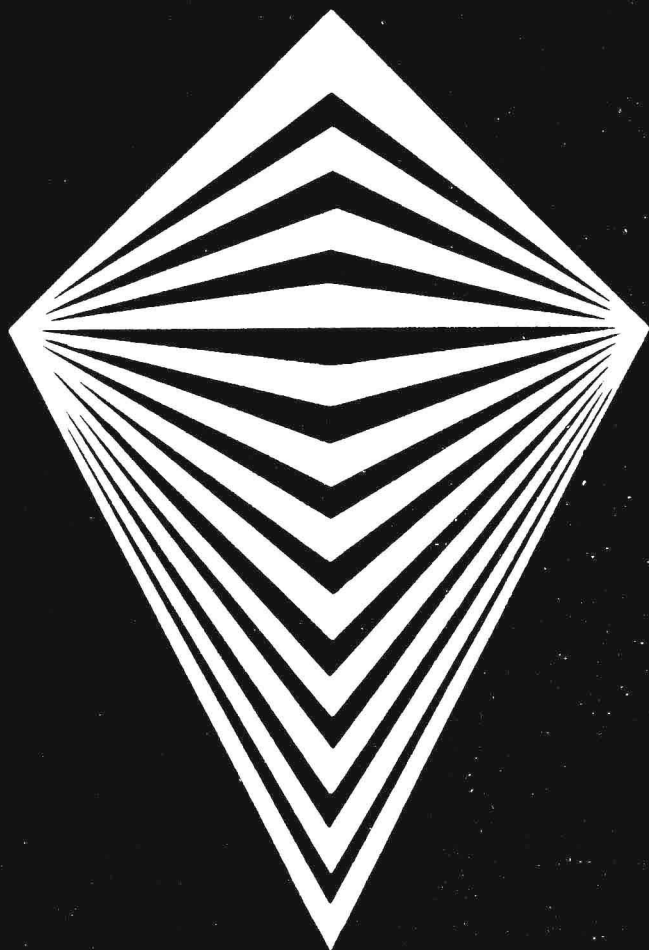




オルツィー
メースン



訳者紹介

松本恵子

1901年生まる，北海道出身
青山学院英文科卒
クリスチー，ミラー等の推理小説の翻訳多数
ディケンズ物語全集等青少年少女向きの翻訳も多数あり

田中睦夫

1911年生まる，鹿児島県出身
ノース・ウェスタン大学大学院卒
和洋女子大学教授・日本モーム協会幹事
訳書に「モーム評伝」などがある

訳者の了
解を得て
検印廃止

世界推理小説大系第8巻

オルツィー・メースン

定価490円

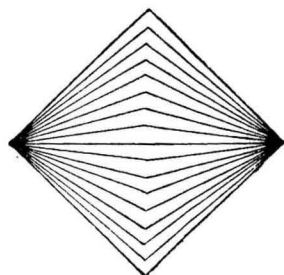
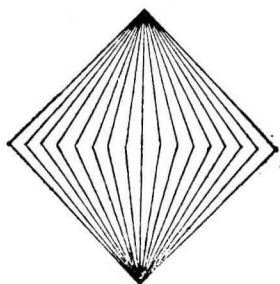
昭和37年10月20日第1刷

著者	E. オ ル ツ ィ ー A.E.W. メ ー ス ン
訳者	松 本 恵 子 田 中 睦 夫
発行者	西 村 俊 成
印刷所	豊 国 印 刷 株 式 会 社
製本所	藤 沢 製 本 株 式 会 社
発行者	東 都 書 房

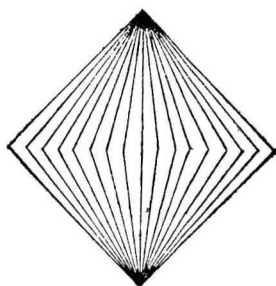
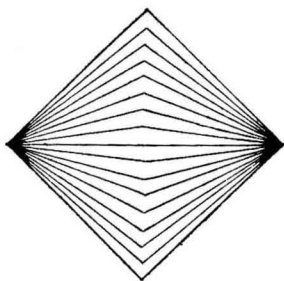
東京都文京区音羽町3-19
電話 (941) 3111
振替東京 72732

落丁本・乱丁本はおとりかえます

© K. Matsumoto M. Tanaka



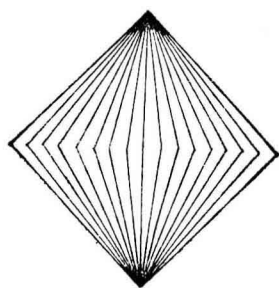
目次



メースン

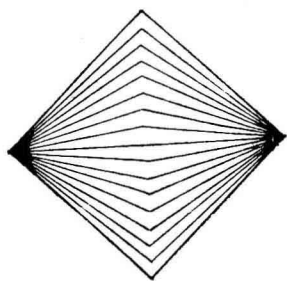
矢の家145

解説＝中島河太郎



紅はこべ
紅はこべ続篇 復讐

松本恵子訳



紅はこべ

一 恐怖の都

血のような夕日が、西の空にかかっていた。朝から晩まで休むことなく活動していた断頭台が、ようやくその日の殺りくを終ったので、見物の群衆は、さらに新たな快楽を追うように、日没と共に閉じられる西の関門へなだれていく。彼らの復讐と憎しみに燃えるすさまじい顔は、野獣のように醜くくゆがんでいた。

群衆はこうして来る日も来る日も、貴族たちが断頭台に引きあげられてむごたらしく殺されていく様子や、人民裁判所で死刑の宣告を受けた人々が、狂暴な人民の手をのがれようとしたり、ようやく関門まで落ち延びてきたところを取押えられ、恐怖に震えおののく様子などを

見て、うちょうてんになつて喜んでいたのである。およそ貴族と名のつく者は、年寄りも子供も男も女も区別なく、すべて皆な人民の敵とされた。光輝あるフランスの歴史を飾った偉人の子孫に生れたために、彼らはことごとく人民の敵として、その復讐を受けなければならなかった。彼らの祖先は人民を压制し、華美なくつの下に罪もない人民たちを踏みについた。その復讐としてくつものはけない貪しい人民は、くつの代りに断頭台の重い刃で貴族たちの頭を踏みつぶしている。血にうえた、どんな断頭台は、終日おびただしい犠牲者を餌じきにしていたが、それでもまだ満足しないで、ついに王と、若く美しい王妃の首まで要求するに至った。

貴族たちはあらゆる手段をかまえて、無慈悲な人民の手からのがれようとした。毎日、夕方になるとパリ市の各関門に集まってくる旅行者や商人などが行列して市外へ出ていく折に、女装した男や、乞食をよそうた女、その他思い思いに姿を変えた貴族たちが、役人の目を盗んで、まさに関門を出ようとするせつな、仮面をひきはがされて、断頭台へ引きずっていかれる光景を、人々は一日中の最も楽しい行事の一つに数えていた。特に西の関門にひかえているピボという男は、はやぶさのような鋭い目を持っていて、いかに巧妙をきわめた変装でも、たち

まち見破ってしまう。それで人々は日没近くになると、西の関門へ集まってきて、まるで猫に狙われた鼠のような脱出者の様子を見物しようとしているのであった。ピボはなかなか茶気のある男で、時には、商人に化けた貴族をわざと見のがしておいて、それとは知らずに、うまく断頭台から逃げおかせたと思つて安心しているところへ、後から追手をやって連れもどして愉快だった。人々はそうしたピボの芝居をことのほか喜んだ。

今日もピボは関門のわきの空きだるに腰をおろして、部下の兵卒たちを指揮していた。彼はそれまでに五十人以上の貴族の仮面をはがして断頭台へ送り、ロベスピエールやダントンから特に信用されているので、自分でも眼のきくのを自慢にしていた。しかし今日はその筋から特別に守備を厳重にするようにという通達があったので、彼は常にもまして注意を怠らなかつた。というのは、近ごろ多数の貴族が関門を通じて、無事にイギリスへ亡命するという事件がたびたび起っているのだった。でそれには、あるイギリス人の一団が黒幕となつて活躍しているのだという噂が伝つてきていた。そのおせつかいなイギリス人の団体は、ある有力な首領をいただいて、その指揮のもとに、当然犠牲となるべき貴族の群れを救い出して、無事にドーヴァーに上陸させるやいなや、姿を消してしまうの

で、誰一人としてその正体を知る者はなかった。この団体の行動はいかにも大胆不敵で、貴族を盗み出す場合には、必ず人民裁判長のチンビュの手許に「われら英国人の一団は作業中なり」と書いて紅はこべの花型の印をおした紙片をとどけるのが常である。それがだれの手によって、またどんな方法で運ばれるのか全く不明だが、とにかく人混みにまぎれて、いつの間にか役人のポケットに投げこまれていたのだ。そして「紅はこべ」の密書がチンビュのところへ到着すると、数時間のうちに、必ずフランス貴族の一団が無事にイギリスへ上陸したというニュースがフランス側に入るのだった。このような事実がしばしば繰り返されるので、この謎のイギリス人を逮捕した者には、莫大な賞金が約束されている。世人は誰でもみんなその大懸賞金を獲得するのは、西の関門を警備しているピボにちがいないと確信して、毎日熱心に見物に集まっていた。

「北門のグロスビエルは実際まぬけな野郎さ。この前の週にもまたやられやがった。おれだつたら決してあんなへまなまねはしない……」と、ピボはにがにがしげに、つばを吐いた。そばにいた上等兵は、

「一体どんな工合にやられたのです」と尋ねた。

「グロスビエルは、でかい眼をあけて見張番を

していたのさ……」ピボが舌なめずりをして語り出すと、人々は彼の周囲に輪を作って、耳をかたむけた。

「諸君も例のおせっかいなイギリス人『紅はこべ』の噂をきいてるだろう。おれだつたら『紅はこべ』だろうが何だろうが、絶対にこの門を一步なりとも通しやせん。ところでグロスビエルは、おおばか野郎で……マーカーレットから帰る荷車が行列して北門を通っていった中に、たるをつんだ車を子供づれの老人がひいて行ったのさ。グロスビエルのやつこさん、大分きこしめしていたが、自分では頭はたしかと自信たっぷりだったと見えて、たるの中を検査したが全部あきだるに見えたんだそう。だから無事に関門を通らせてしまったのさ……」と得意げに周囲を見まわした。人々は口ぐちにグロスビエルをのしつた。

「それから半時間ばかりすると、守衛隊長が一隊の兵卒を従えてやって来て『今たるをつけた荷車が通つたらう』とグロスビエルに尋ねた。

するとあいつは『へえ、三十分ばかり前にそんな車が通りましたっけ』と平気で答えたんで、隊長は怒るまいことか『このばかやろう！ あゝの車にはシャリイ公爵の一族が乗っていたんだぞ！ それを通してやるとは、きさまの首はないぞ！』とどなりつけたものだ。グロスビエルはぎゃふんさ。いくら地団だ踏んでくやしがつ

ても後の祭りというものさ。どうだい諸君、その荷車をひいていた老人が何と『紅はこべ』だったのさ」

それをきくと、群衆は憤然としてグロスビエルの不注意を責め、彼を断頭台にあげよと叫ぶ者もあった。ピボはさも得意らしく、しばらく高笑いをしていたが、さらに言葉をついで、

「すると隊長は『さあ、みんな後に続け！ まだそう遠くは行くまい、『紅はこべ』には大した賞金がついているぞ、進め！』という号令と共に一ダースほどの部下をひきいて、まっしぐらに荷車の後を追っていった」

怒りにわき立った市民たちは、

「そんな事したって追いつけるものか！」

「そうとも、どうせ逃がしてしまったにきまっているさ！」

「グロスビエルの怠慢からだ！」

「よろしく処刑すべきだ！」

と口々に叫んだ。ピボは横腹が痛くなるほど笑いこけていたが、ようやく息をついで、「ところでだね……ところでだね諸君、実のところ、貴族らはその荷車には乗っておらんかったんだよ。もちろんそのじいさんが『紅はこべ』だというのは、真赤なうそだったのさ」といった。

「はてね？」

「何だって……」

「つまりだな、後から追いかけていった隊長が例のおせっかいな『紅はこべ』で、部下の兵隊は、貴族どもだったのさ。どうだい」

群衆はそれを聞くと、何やら恐怖のようなものを感じ、急に鳴りをしずめてしまった。太陽はいつか低く西の空に落ちて、斜めになった淡い光線が人々の顔を黄色く染めた。いよいよ関門を閉じる時刻がきたので、ビボはおしゃべりをやめて立ちあがると、雑然と集まっている荷車のほうを向いて、

「進め！」と号令をかけた。それらの車は、みんな近郊の農家へ帰り、翌朝再び野菜を積んでパリのマーケットへ出てくるのである。ビボは朝夕にこの関門を出入りする農民の顔を一つ残らず見知っている程だが、それでも念を入れて、いちいち詳しく荷車の中を調べた。

「おれは決してグロスビエルのような、へまはやらんぞ」とビボはひとり言をいった。

それらの荷車をひいて来るのはたいいてい女で、彼女たちはマーケットから帰ってくると、断頭台の周囲に陣取って、日向ぼっこをしながらか、おしゃべりをしたり、編みものをしたりして、開門時間のくるのを待っていた。ビボはそこにいる年寄りの女が箱車のそばに坐って午後中ずっと編みものをしているのを見ていたが、その時、ふと気がつく、むちの先に金髪、銀髪、その他さまざまな種類の毛をくくり付けて

いるので、

「おい、婆さん何を作っているんだね」と声をかけた。

「わしはな、断頭台様の情人と仲よしになったでね、こうやって毎日ころげ落ちてくる頭の毛を取ってもらっております。あすも又ももう約束をしましただがね、わしはあすここへ来られるやら、どうやらわかりませんだ」とにやにや笑いながら答えた。さすがのビボもこの女の恐ろしいえものに震えあがったが、女の意味ありげな言葉に気をひかれて、

「それは又どうした訳だね」と尋ねた。

「ここにいるわしの孫むすこが、ついさっきほうそうにかかったがね、他人様が見てベストかも知れんといっておるで、そんな事にでもなったら、あすはこの門を通らせてもらえまいと思つてね」と後の箱馬車を指さした。

ビボは最初ほうそうと聞いて一歩あとへ退いたが、次ぎにベストという言葉に耳にすると、できるだけ後のほうへ引きさがって、

「とてもない婆さんだ」とはきすてるようにいった。

それと同時に群衆もたじたとになって、彼女の箱馬車から遠のいてしまった。老婆はそれを見てせせら笑いながら、

「とてもないとはお前さんの事さ、大の男がベストぐらいをそんなにおっかながって、よく

も役人が勤まったものじゃ」といい返した。

「ベストだ！ ベストだ！」

人々は顔色を変えてささやき合った。

「婆さん、さっきと出ていってくれ！ そのベストを積んだ馬車を一刻も早くひいて行つてくれ！」とビボはほえるように叫んだ。

老婆は笑いながら、やせ馬にむちをあてて、関門をゆうゆうと出ていった。この事件のため、人々はすっかり興をそがれて、あたかも互いにベストをのけ合うように、てんでに他人を避けて、いつになく静まり返っていた。そこへ守備隊長の一人が馬を飛ばしてきて遠くから、

「箱馬車はどうした！」と息をはずませながら叫んだ。

その隊長はビボの顔なじみであったから、グロスビエルのように、イギリス人に早変わりする心配はなかった。

「箱馬車は幾台もありましたが……」

「婆さんがひいていたやつだ」

「息子がベストにかかったといった婆さんの事ですか」

「そうだ……よもやあいつを通らせはしまいな」

「何ですって……」というビボの紫色のほおは見る見る青ざめていった。

「ばか！ あの箱馬車の中には、タアネ伯爵夫人と二人の子供、人民の敵が合計三人しんの

でおったはずだ」

「ではあの婆さんは……」

「あいつが『紅はこべ』さ！」

という隊長の言葉に、一同あつげにとられて、口もきけなかった。

二 漁夫の宿

娘のサリイは台所で、二人の女中を相手にいそがしく立ち働いていた。年取ったジェミマは煮物なべをかきまわしながら、ぶつぶつ不平をいっている。隣りの食堂から、

「おい、サリイ、どうしたんだい」という快活なさびのある声が響いてきた。

「まあ、まあ、ほんとうに忙しいこと。一体、何がほしいとおっしゃるんでしょう」とサリイは顔をしかめた。

「ビールのお代りにきまつているじゃないか。考えてごらんね。ジミイ・ピチキンが何で一杯ぐらいのビールですましなさろう」とジェミマがつぶやいた。

「おまけにハリイさんの、のどのかわき方は一種特別だからね。だれかさんの顔を見ないうちには決してのどのかわきが止まらないんだとさ」と女中のマアサが小声に相手の女のひじを突いて、くすくす笑いながら、サリイの顔をぬすみ見た。

「おい、サリイ！ サリイったら！ 何をしてるんだい」と再び呼び声が聞えてきた。

続いて人々が、かしの大テーブルをたたく音が合奏のように起った。ジェミマはししぶしぶ立っていつて、あわ立つビールをジョッキになみなみと注いだ。このビールは「漁夫の宿」の名物で、チャールズ王の治世から世間に知られている。

サリイはマアサの顔をにらみつけ、わざと素知らぬ様子で、

「お父さんたら、ビールのお給仕ぐらい自分でしてくれたっていいのに」と口ごごとをいいながら、壁のすみにつるしてある粗末な鏡の前へいつて髪をなでつけると、ビールを載せた盆を食堂へ運んでいった。

サリイが美しい齒なみを見せて微笑しながら入っていくと、テーブルに着いていた人々は、

「サリイが来た！ サリイが来た！ サリイ万歳！」といっせいにやし立てた。

「サリイや、おれはお前がつんばになったのかと思つたよ」ジミイ・ピチキンは、かわいたくちびるを手の甲でこすりながらいつた。

「そんなにやんやいわないで下さいよ。今すぐあげますから。ほんとにまあ、何て騒ぎなの。まるでおばあさんの死目にでもあいに行くような騒ぎじゃないの。私はまあ、こんなにせき立てられた事ってありやしないわ。忙しくて目が

まわるじゃないの」というサリイの言葉に、人はまたどっと歓声をあげた。

サリイは口でいうほど忙しくもないと見えて、すぐには台所へ帰ろうとせず、天井からさがっている二つのランプに照らし出されている陽気な人々の間にまじって、ビールの杯をかたむけているハリイ・ウェイトの美しい頭髮とおだやかな空色の眼に見とれていた。

ふといパイプをくわえた主人のジェリバンドは、煙炉の前に足をひろげて突っ立っていた。彼はイギリス以外の国は野蛮人の住むところとて、欧州の国々は無道徳の巢であると思ひこんでいるほど、恐ろしくイギリス氣質のがんこな人間である。彼は旅館の主人としての服装をことごとく身につけている。びかびか光る金ボタンのついた紅チョッキ、コルテンの半ズボン、ねずみ色の毛糸のくつ下、止め金のはまつた、いきな靴などは、当時イギリスの旅館の主人特有の服装であつた。彼は政治を論ずるのが何よりも好きで、店の事などそちのけにして、集まつてくる客を相手に政談に花を咲かせるのが常だつた。従つて店の仕事は、母親のな

い娘のサリイが全部切りまわさなければならなかつた。

「漁夫の宿」へ来る連中は、いうまでもなく主として荒海の潮風にのどをかわかす漁夫の群であつたが、その他にロンドンとドーヴァーの間

を往復する乗合馬車はこの宿から出るので、海峡を越えて欧州大陸を往復する旅客はことごとく、この主人のジェリバンドと、フランス産のおどろ酒と、名代のビールとに親しむわけである。

それは一七九三年の九月末であつた。ながらく続いた天氣が急にくずれて、三日前から豪雨が降り続き、畑を荒らし、道路を洗い、激しい音をたてて窓を打っている。

「ジェリバンド君、九月にこんなひどい雨が続くというのは珍らしいね」と今まで政談にふけていたヘムシードは、煙突から落ちこんできて、煖炉の上でじいじいいう雨のしずくを見ながらいった。彼は常識に富んでいる上に、政治にも明るいので、この界隈でもすくなくらず尊敬されている人物で、ジェリバンドとは、いい話し相手であつた。

「全くめずらしい、おれは六十年もこの土地に住んでいるが、こんな雨は見た事がない」とジェリバンドは答えた。

「これはしたり、六十年は恐れ入るね、まず五十七年間ぐらいということだろう。二、三歳のころは天氣の事などには気がつかんからね。

そういうば、おれはもう七十五年もこの土地に住んでいるわけだ……まるで四月のような氣候だ」とつぶやきながら、彼はたえず煖炉の中へ落ちてくる雨を見つめていた。

「全くね……ところで今の政府は一体どうなると思うね」

ジェリバンドは再び以前の話題にかえろうとした。ヘムシードは首をふりながら、

「政府がどうあろうと、おれたちの知った事じゃない。ロンドンへ行っちゃあ、おれたちのような貧乏人の言い草なんぞ通用せんからな。それよりもこの雨さ、この雨がやんでくれん事にはどうにもならん。大切な畑がめっちゃめっちゃになって、折角じゅくした果物はみんな台なしにされてしまう。こんな悪い天氣がなが続きすると、又、外国のくさったような果物を買わねばなるまい。何といっても、英国産のものに限るんだが、この雨にあつては形なしだ。聖書にもある通り……」

「ほんとうさ、海の向うでできた物なんぞ、みんな腐つておる。人間がすでに腐つておる。あいつらは、まるで悪魔だよ。毎日のように、貴族や王様を殺すのを仕事にしておる。ところで我が国ではビット氏、フォックス氏、バルク氏などが、あいつらのするまゝにさせて置るか、それとも抗議を申し込んで止めさせようかと、毎日議論ばかりしておる。ビット氏は『勝手に人殺しをさせておけ』というし、バルク氏は『止させる』というし、どうなるものかね」

「おれはビット氏の説に賛成だ。他人の事なんぞ、何をしようとはって置くがいい」

ヘムシードは少々ジェリバンドの政談に飽きてきたので、やけになって叫んだ。そして更に、

「ねえ、あいつらは勝手に人殺しをするがいい……然し、九月のこの雨だけはごめんこうむりたいものだね。聖書にある通り……」と最初から、のどの所まで出てきている聖書の句を役だてようとしたが、残念ながらサリイの大げさな声にさえぎられてしまった。

「いやですよ、ハリイさん、びっくりするじゃないの！」

サリイの金切り声が不幸にもジェリバンドの耳に入つたので、彼はむずかしい顔をして、

「おい、サリイや、若い衆を相手にふざけている時じゃないぞ。早いこと台所を見てやりな」とたしなめた。

「台所の用なんかもうすっかりすんでしまったわ」

とサリイは気軽に答えた。ジェリバンドは自分のひとり娘が漁夫のせがれなどと結婚するのを望まないで、なるべくハリイのそばに寄せつけないほうがいいと思つていた。

「サリイや、アントニー様のお食事の支度をしっかりやっておかないと、承知しないぞ」と彼はきびしい調子でいった。

サリイはししぶ若者のそばをはなれた。ジミイ・ピチキンはジェリバンドの顔色を見て

とって、

「今日はまた特別のお客かね」とそばから声をかけた。

「さよう、今日はアントニー男爵様のご友人が、アドル・フォックス卿や、その他のご友人といっしょにフランスから、ある伯爵様のご家族を助け出しておいでなさるのさ」

それをきいて、ヘムシードは少しむっとして、

「ふむ、一体、何だってそんないらぬおせっかいをするんだらう。おれは人の事に鼻を突っ込むなんて大きらいだ、聖書にも……」

「それはもう君はビットのご親友だから、『おれらをして思うままに殺さしめよ』というのは、もっともだよ。君の友人のフォックスもそういつておるからな」とジェリバンドは皮肉をいった。

「失敬ながら、おれはそんな事は知らない。政治の事なんざあ何も知らない」とヘムシードはいい返した。ジェリバンドはますます調子に乗って、

「じゃあ君は、殺人政策を宣伝しにやって来ておるフランス人の友達でも持つておるんだらう」

「おれはそんな者は知らん、おれの知っておるのはただ……」

「さよう、おれの知っておるのは、ここに一人

の男がいて、イギリス人のような涼しい顔をしただかわず食い人種と仲よしになったという事だ。そしてその男がいま自由を口にし、革命を叫び、貴族を倒せと叫んでいる。すなわちそこにひかえてござるヘムシード君のごとくに……」

「おいおい、ジェリバンド君、何をいつておるんだ。冗談はいいかげんに止めてもらおう」

「諸君、諸君のお考えはいかがです。フランスのスパイは今やわが英国に侵入して、野蠻きわまる共和主義の宣伝をやっているのです。それを見のがしておくとは、もつての外ではないですか」

ジェリバンドはヘムシードの抗議などには耳もかさずに、人々の意見を求めた。人々は彼のおしゃべりにあつげに取られて、ぼかんと口を開いていた。先刻からその片すみに陣取つて、無心に将棋をさしていた二人の旅人は、将棋盤をわきへ押しやって、ジェリバンドの言葉に聞き入っていたが、その中の一人が、

「君のいうフランスのスパイが、そんなふうに関共和主義を宣伝しているのは事実ですか」と質問した。

「ほんとうかうそか、そこにいるヘムシード君に尋ねなさるがいい。彼は多くの革命党を知己に持つておるですからね」

とジェリバンドが真顔で答えた。それを真に受けた相手は、

「ヘムシードさん、それは実際の事ですか」と尋ねたので、ヘムシードは真赤になって叫んだ。

「そんな事、おれが知るものか！ いいかげんな事はかりいつておる！」

「ジェリバンドさん、ではあなたのおっしゃるスパイが来て、あなたの平和な思想をかき乱さないように祈りましょう」

と旅人が本氣になつていったので、ジェリバンドはどうとうたまらなくなつて、

「ははは……へへへ……」と腹をかかえて笑ひこけた。人々もそれに釣ひ込まれて、どつと笑ひ声をあげた。

三 亡 命 者

食堂に集つた人々が夢中になつて、フランス革命を攻撃したり、パークが一時も早く革命派に宣戦を布告する事を主張しているのに対して、時機を見ていゝといつてゐるビットの手ぬるい政策を非難したりしてゐるところへ、サリイが入つてきて、

「アントニー卿のお馬車が着いたようだわ」といいながら、表戸を開けにいった。

アントニー卿は雨にぬれた腕をサリイの肩にかけて、彼女のばら色のほおにキスをして、「サリイは会うたびに、だんだん美人になる

ね、これじゃあお前のまわりに集ってくる若い者たちを寄せつけないようにするには、親父さんも一苦労だろう。ハリイ君のご意見はどうだね」と快活に冗談口をきいた。

ハリイは当惑顔をしてそれには答えなかつた。

アントニイ卿はエキセター公爵の息子で、英國紳士の典型ともいふべき堂々たる風采をしていた。長身で、肩幅が広く、晴れ晴れとした顔つきと快活な笑い声とは、ロンドンの社交界で何処へいっても歓迎されていた。旅行好きの彼は大陸への往復の途次、いつもこの「漁夫の宿」の客となるので、この辺の人たちとは顔なじみであった。

彼は、ジミー・ピチキン、その他の人々に軽くなずいて挨拶をする、ようやくサリイを放して、炉辺へ大またに歩み寄った。その時、例の将棋をさしていた二人の見なれぬ人物に気付くと、なぜかまゆをひそめたが、すぐ快活な表情にかえって、わきにいたへムシードに話しかけた。

「やあ、へムシード君、時に果物のできはどうかだね」

「誠に不作で困ったものですよ。それはそうとどんな様、海のむこうの国は一体どうなるとお思いなさる、狂人共はああして毎日、貴族や王様まで片っぱしから殺しおるが、いつになっ

たらあの騒ぎがおさまるんでござんしょう」

「全くとんだ世の中になったものだね。とにかくあの連中は貴族たちを殺せるだけ殺さなくてはすまさないだろう。しかし今日も又われわれの友人が、やつらの手から危くのがれてきたよ。今晚ここに着くはずになっている」といながら、彼は例の二人をちらと見た。そしてジェリバンドが、

「それはまあ結構なことでございます。旦那様方のお骨折りで……」という、突然その腕をおさえて、

「しっ!」といいながら注意深い眼つきでもう一度二人のほうを見た。

「ああ、あの人たちでございますか、あれは何もご心配なさるような人間ではございませんよ。二人ともつい最近ドーヴァーへ来たのですが、われわれと同じく忠実な王党でございす。何でもこの土地で商売を始めるのだとかいう事です」

「商売だって? それはいいよ油断がならんね。私はあんな陰険な顔は見たことがない」

「あれは、やめめのせいでございすよ。だからあんなに浮かない顔をしているのでございす。決してご心配なさる事はございせん。わしのように客商売を長くしておる者は、顔つきで身柄を見分けるのは、お手のものでございす。なあに、あの二人はわれわれの同志にちが

いございせん」

「そうか、お前がわれわれの友人と認めているというならそれでよろしい。ところで他に誰もここに泊るきづかいはあるまいな」

「決してございせん」

「きつとかね。誰かほかにくる者はないかね」

「それはない事はございせんが、たぶん旦那様にはご異存のおありなさらぬお方だと存じます」

「それは誰だ」

「バーシイ様が奥方と一緒に御見えになるはずでございす。もっともお泊りにはなりませんでございす」

「バーシイ夫人がお見えになるって?」とアントニイ卿はおどろいたように聞きかえした。

「さようでございす。先刻バーシイ様の船長がまいりまして、奥方のお兄上様が今日バーシイ様のヨットでご渡仏なさるので、バーシイ様ご夫妻おそろいで、こちらまで御見送りにおいでになると申していきました。これは別におさしきわりはございせんか」

「よろしい、さしつかえはない。ただサリイの料理した上等の晩飯さえ食べさせてもらえばそれで申し分なしたよ」

「ああ、ごちそうなら大丈夫ですよ。もうすっかりできていますもの」とと食卓の上にダリアの花を飾っていたサリイがいった。そして、

「でお食卓は何人様ご用意いたしましたしょう」と晴れやかな顔をあげて聞くと、アントニー卿は、

「五人前頼むよ、それから十時までに食事をすますとしよう」と答えた。

サリイは馬のひづめの音が遠くから響いてくるのを聞くと、

「ああ、きつとお着きだわ」と興奮した顔つきでいった。

食堂にいた人々は一様にざわめき出した。

いずれも海を越えてきたアントニー卿の友人に、少なからぬ興味を持っているらしい。サリイは気忙しく鏡にうつった自分の姿をのぞいて、手早くえもんをつくろった。ジェリバンドは、あわてて珍客を迎えに立った。ただ例の二人の男だけは、無関心な様子で将棋に熱中していた。突然に、

「奥様、まっすぐお出でになって右手の戸口からおはいり下さいませ」という気持のいい声がした。

「いよいよご到着だ。さあサリイや、できるだけ急いで食事の用意をしておくれ」とアントニー卿は喜ばしげにいった。

やがてフォークス卿の先導で、フランスの貴婦人とその令息と美しい令嬢が戸口にあらわれた。アントニー卿は両手をひろげて、

「ようこそお出でになりました。むかしながら

の我が英国は皆様を歓迎いたします」といった。

「ああ、あなたはアントニー卿でいらつしやいますね。フォークス卿からいろいろとおうわさを伺っております」と老貴婦人は外国なまりの英語でいった。

「仰せの通りでございます、奥様」

アントニー卿は貴夫人と令嬢の手に口づけをして迎えると、次ぎに若い貴公子とフォークス卿と、かわるがわる握手をかわした。

サリイはかいがいしく婦人たちのオーバーをぬがせていた。二人とも震えながら、赤々と燃えている煖炉に目をそそいでいた。サリイはすぐ台所へ走っていった。ジェリバンドは煖炉に安楽いすを運んでいって、婦人たちの席を設けた。

老婦人はきやしゃな手を煖炉にかざしながら、アントニー卿とフォークス卿の顔を見あげて、

「皆様に何とお礼を申し上げたらよろしいのでございましょう」と感謝にたえぬ様子でいった。

「奥様方がご無事に英国へお着きになりましたのは何よりでございます。船の上では別におさわりもございませんでしたか」

「ほんとうに英国へまいりましたのは、何よりうれしい事でございます。もうすべての苦しみ

を忘れたように、安らかな気持ちになりました」と老婦人は眼に涙を浮かべて静かにいった。

「たぶんフォークス卿は皆様にとつて、いいお道づれであつたと存じますが……」

「それはもう申し分のないお道づれでございます。フォークス卿は親切そのものでいらつしやいます。私も子供たちも、どうして皆様にご恩返しをいたしましたらよろしいか分りませんでございます」

若い令嬢は、きつから一言も口をきかずに、涙をたたえた目で、じいっとフォークス卿の横顔を見つめていた。そして、おりおり卿の優しい視線に出会うと、青白いほおを紅く染めた。彼女は珍らしそうにあたりを見まわして、

「ここは英国なんですね」と子供っぽくつぶやいた。

「さよう、ここは英国の一部分でございます。しかし英国全体も喜んでお嬢様をお迎えた事でございましょう」とフォークス卿が答えた。

彼女は再びほおを染めた。美しい顔は包みきれぬ微笑に輝いていた。二人の若い心は無言のうちにつか解けあつていった。

「おい、ジェリバンド、食事はどうしたい。空腹が目がまわりそう。美しいサリイはどこへ行つた!」とアントニー卿が快活な声をあげた。

「へい、ただいますぐに。これサリイや、もういいんだらう」とジェリバンドは台所の戸を開けてどなった。

間もなくサリイが湯気のたちのぼる大きなスープの鉢をささげて来た。

「やれやれ、ようやく夕食にありつけるか」

アントニイ卿はおどけた調子でいいながら、伯爵夫人に腕を貸して、

「ご案内させていただきます」といんぎんにいった。

一同が食卓につくと、ヘムシードも漁夫たちも遠慮して食堂を出ていったが、さっきの二人だけは相変らず酒杯をかたむけながら、将棋を続けていた。それにハリイもへやのすみに残って、忙しく給仕をしているサリイの姿を、やきもきしながらながめていた。

サリイは英国の田園を代表しているような、美しく感じのいい娘であった。それゆえ客の中の若い貴公子が、彼女から目をはなさないのも無理はなかった。彼ははなやかな服装をした、多感な十九歳の少年であった。

「ここが英国ですね。何もかもすっかり気に入ってしまった」と若い貴公子は、サリイに秋波を送りながらつぶやいた。

「ここはもう英国です。あなたは快樂を追うフランスを捨て英国へいらしたのですから、これからはこの国の道徳を守らなければなりません」

ん」とアントニイ卿は笑いながらいった。

アントニイ卿と伯爵夫人とが食卓につくと、ジェリバンドは後にまわって椅子をただしたり、グラスにぶどう酒をついでまわったりした。

サリイはわきに立って、いつでもスープを盛る用意をしていた。ハリイは若い貴公子がサリイに秋波を送っているのに気がつく、顔色を変えて、今にも飛びかかりそうな様子を見せていたが、友だちの一人が来て無理に屋外へつれ出してしまった。伯爵夫人は暖炉前に、フォークス卿と肩をならべている娘をふり返って、「スーザン」とたしなめるような調子で声をかけた。彼女はあわてて立ちあがると、だまっ

四 紅 は こ べ 団

食卓をかこんでいるこの一団は、いかにも楽しそうに見えた。フォークス卿とアントニイ卿とは英国紳士として、立派な品格と、すぐれた風ぶうを備えた快活な人物であった。フランス貴族のタアネ伯爵夫人と、二人の子供は、今しも恐怖のちまたをのがれて、この英国に自由と平和を見出したところであった。

その室のぐうに陣取っていた二人の男は、顔をあげてにぎやかな食卓のほうを見ていたが、互いに何事かうなずき合って、一人の男は

そつと木の腰掛の下へもぐり込んだ。同時に他の一人はあくびをしながらかちあげて、わざとらしく戸を音高く閉めて出ていった。

食卓をかこんでいた人たちは、だれ一人として、この怪しい男の行動に気づかなかったの

で、相手の男が出て行く後姿を見送ると、「とうとう我れ我れだけになった」とアントニイ卿は喜ばしげにいった。

若い貴公子は杯を高くあげて、

「悲惨なわれらフランスの亡命者に、かくも心地よき宿を与えたまいし英国王ジョージ三世の健康を祝します！」といった。

アントニイ卿もフォークス卿も、

「陛下のために！」といって乾杯した。次ぎにフォークス卿が、

「フランス国王ルイ陛下の上に神の祝福と勝利のあらんことを！」

といって杯をあげた。人々は痛ましい国王の上を思いながら、無言のうちに乾杯した。アントニイ卿は座が白けたのを見ると、

「タアネ伯爵が日ならずして、無事に英国へ渡られる事を祈ります」と朗らかな調子でいった。

「ほんとに、そのような事が望めますでございましょうか」と伯爵夫人はくちびるを震わせながらいって、うれしいを含んだひとみで、アントニイ卿の明るい顔を見あげた。

「奥様ご心配なさいいますな、ごらんなさいませ、あなた様の、令息も令嬢も、この通り無事に英国へお着きになったではございませんか。伯爵も必ず近いうちにこの土地をお踏みになりましょう」と確信ある調子で答えた。

「すべてを神のみ胸におまかせして祈るよりほかはございません」伯爵夫人は重い溜息をもらした。

「奥様そのような心細いことをおっしゃらずに、伯爵を必ずお救いすると誓ったわれわれ英國人をご信用下さい」と横合いから言葉をはさんだのは、フォークス卿であった。

「それは申すまでもございません。こうして私が無事に、あの恐ろしい都をのがれる事ができましたのは、全くあなたの方のおかげでございます。あなたの方のお力は全く奇跡と申してもよろしいほどでございます」と夫人は答えた。

「奥様、私どもはある人物のほんの手先にすぎないのでございます」

「私もこうしてあなた方と一緒に安らかな夕べを迎えますにつけても、国に残してまいった夫の事が案じられてなりません。私は子供たちさえいなかったら、決して夫を残して自分だけのがれて来ようとは思いませんでした。夫の身は私どもにも増して危険でございます。国民は血に飢えた野獣のように、夫の命をねらっております。それを私は見捨ててきてしまいまし

た。そして自分ばかりこうして安らかな時を迎えております」といいながら、伯爵夫人は、はらはらと涙をこぼした。スーザンは途方に暮れて、ただ母のほおにやさしく口づけをするばかりであった。

アントニー卿も、フォークス卿も、伯爵夫人の声に強く胸をうたれたが、英國人の性格として、感情をみだりに表面に出すのを恥じて、くちびるをかみしめて、おしのように黙りこんでいた。スーザンは美しい顔をあげて、

「私は、フォークス様が私共をここへお連れくださいましたように、きっとお父様を無事に英國へ連れてきてくださると信じておりますわ」といった。

人々は彼女の無邪気な言葉に思わず微笑した。フォークス卿は、

「お嬢様のお言葉には恐れ入ります。お嬢様のために生命をも惜しみませんが、しかし私共はこの団体を組織しております首領の命ずるままに働いているばかりでございます」と答えた。

スーザンはフォークス卿の言葉にひどく驚いた様子で目をみはった。伯爵夫人は、

「首領でございますって？ 私共は今まで一度もそのような深い事を考えた事がございませんでしたわ。ほんとうにそうでございますわね。これだけの事をなさるのには、きっと上に立つ

お方がおありになるはずでございますわ。その

首領になっていらっしゃるのは、どなたでいらっしゃるのです？ 私共は何よりも先にその方のところへお礼にあがらなければなりません。その方はどこにおいでになるのでございましょう。どうぞお教えくださいませ」と熱心にいった。

「奥様、それはできません」アントニー卿は答えた。

「なぜでございますの？」

「なぜかと申しますと、我れ我れの首領『紅はこべ』は黒幕になってこの仕事をしておりますので、我れ我れ部下の者は、絶対に秘密を守る誓いをたてているのでございます」

「紅はこべでございますって？ ずいぶんおかしい名ですのね。紅はこべって、何の事でございますの？」

「お嬢様、紅はこべと申すのは、英國の野に咲くごく小さなつまらない花の名でございます。

世にもたぐいまれな大胆で勇敢な首領は、自分の善行をあくまで秘しておくとする武士的な考えから、このつまらない花の名を名乗って、あくまでもこの貴い使命を秘密のうちにしなして、げようとしているのでございます」と説明した。

それを聞くと若い貴公子は、

「ああ、紅はこべの事なら私もたびたび聞きました。赤い小さな星の形をした花でしょう。王党の人たちがバリーを脱出すると、きっと紅はこ